

明日に生きる



明日に生きる (改訂版)

平成 9年1月17日 発行

平成24年1月17日 改訂

編集・発行 兵庫県教育委員会

＜お礼＞本教材の作成に当たっては、報道各社、関係自治体、関係者の皆様にご多大なご協力をいただきました。中でも、神戸新聞社には、数多くの報道写真、記事の提供、監修等幅広くご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

明日に
生きる

明日を信じて

あの日のことはわすれない
けっして

かけがえのない尊い命をうばった

あの地震

人々をきょうふの世界へ送りこんだ

あの地震

でもね……

明日への希望をあたえてくれたのも

あの地震

人々に生きるという喜びをあたえてくれたのも

あの地震

ボランティアの人たちのすがたが

今でも目にやきついている

あの時のおみそ汁

すごくあたたかかった

明日を見つめているわたしたち
生きるという喜びをかみしめて



明日に生きる

もくじ

4		津波から大切な命を守ろう！
6	自分の身は自分で守る	さい害直後のこんな生活乗り越える
10	生き方を考える	南三陸にさく「はるかのひまわり」
16	公の助けを得る	さい害時に命を救う仕事
18	災害について知る	兵庫県の気象と水害
22	災害について知る	想定や経験をこえた東日本大震災
26	自分の身は自分で守る	き険な空間を減らそう
30	共に生きる	災害後の生活に求められる「公平さ」
34	災害について知る	二つの大地震
40	自分の身は自分で守る	しゅん時の判断 救った命
44	自分の身は自分で守る	地震時に命を守る避難行動
48	共に生きる	ぼくらができる被災地支援
52	生き方を考える	ぼくたちの夏
54	公の助けを得る	阪神・淡路大震災からの復旧・復興
60	こころをケアする	ふれあうと温くなるね
62		震災モニュメントマップ 芦屋市の小学校の震災追とう式



阪神・淡路大震災を語り継ぐ

13	大津浪記念碑
17	阪神・淡路大震災のときに多くの命を救った地いきの助け合い
37	まぼろしの白石村
45	津波てんでんこ
57	正確な情報を早く知る

1	明日を信じて
8	何も考えられない
14	お父さん
20	ぼくは一人じゃない
24	共に支え合って
28	何かしたい 役に立ちたい (小学生が行った避難所ボランティア)
32	おばあちゃん 風呂に入りよ
39	12時にサイレンが町中にひびいた
42	悲しみを乗り越えて
46	わたしにとっての地震
48	ぼくらも何かをしよう
50	花と水
58	仮設住宅
61	転校
64	今日は 青い日



表紙 (題字)
吉崎 美穂 県立北須磨高等学校 2年

表紙のポスターは「防災力強化県民運動」ポスターコンクールの受賞作品から選出しました。
 <作者一覧> (受賞当時の学年)

南 心 神戸市立御影北小学校 1年	荒木 恵祐 神戸市立住吉小学校 1年
小関 純果 神戸市立原田中学校 2年	畑 知沙 加古川市立陵南中学校 3年
佐藤 孝祐 養父市立養父中学校 3年	栗田ひろみ 県立姫路工業高等学校 2年
花木 紗英 県立姫路工業高等学校 2年	日下部まこ 県立東播磨高等学校 3年

津波から大切な命を守ろう！

文 河田 惠昭

2011（平成23）年に起こった東日本大震災では、なくなった人、ゆくえ不明になった人をあわせておよそ2万人にのぼりました。

なぜ、こんなに多くの方が被害にあったのでしょうか。被害にあった人の半数以上が、おじいちゃんやおばあちゃんでした。年を取ると、足が悪くなって歩くことが困難になったり、ねたきりになったりする人が増えます。だから、自分自身ですぐに避難できる人が少なかったのです。

また、助かった人の中には、一度家に帰った人が3人に1人もいました。実際に津波を見てからにげた人も、10人に1人いました。これらの人も、一歩まちがえれば、津波に巻き込まれていた可能性があります。

津波でたくさんの方がなくなった地域では、立ってられないような強いゆれが1分以上続きました。もちろん大津波警報も出ました。しかし、半数近くの方は、その警報が出たことを知りませんでした。長い時間にわたって地震でゆれたときは、津波が来るかもしれないと思わなければなりません。そう思ったら、にげなければなりません。これは、兵庫県だけでなく日本のどこでも、あるいは世界の海に面した国でも応用できる知識です。

近い将来、四国のおきて、南海地震が起こるのではないかと、とても心配です。兵庫県には、南海地震で起こった津波の第一波が、まず淡路島に約50分で行って来ると予想されています。その後、津波は大阪湾に入り、神戸や東の芦屋、西宮、尼崎を、あるいは西の明石から赤穂を順番におそいます。しかし、これらの地域では津波が来るまでに十分な時間があるはずで、あわてずに避難すれば、命をなくすことはありません。そして、避難したら、少なくとも6時間程度、警報が出ているあいだは家に帰ってはいけません。大きな津波は何度もくり返しやって来るのです。

大切な命を守るためには、どこへ避難するのか、どの道歩いていくのか、家にねたきりのおじいちゃんやおばあちゃんがいたらどうするのか、いろいろなことを地震が起こる前に周りの人と相談して、決めておく必要があります。そして、避難訓練にも参加しなければいけません。地震が起きても、そしてそれが真夜中や、雨が降っているときだとなおのこと、人間というのは、つい、避難しなくてもよいのではないかと考えがちになります。それがとても危険なのです。家族そろって避難訓練に参加して、災害に備えて最善の準備をしておきましょう。

津波はとても手ごわい災害です。津波に対しては、何よりも「にげるが勝ち」なのです。でも、実際には、地震で家がこわれて、道路が通れないかもしれません。ブロック塀も倒れているかもしれません。このような場合でも、地震が起こる前に調べておけば、他の道に行くこともできるでしょう。災害にあっても、けがをしたり、命を落としたりしないためには、正確な知識をもち、前もって準備をしておくことが、とても役に立つのです。学校や家でどのような準備ができるのか、先生や友達、家族のみんなと話し合ってみましょう。



河田 惠昭（かわた よしあき）

関西大学社会安全学部長・社会安全研究科長・教授。工学博士。専門は防災・減災。現在、阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長（兼務）のほか、京大防災研究所長を歴任。京都大学名誉教授。2007年国連 SASAKAWA 防災賞、09年防災功労者内閣総理大臣表彰、10年兵庫県社会賞受賞。東日本大震災復興構想会議委員。
現在、日本災害情報学会会長。兵庫県防災教育副読本作成検討委員会委員長。



（共同通信社発行 『絵本 にげましょう』より）

さい害直後のこんな生活を送りこえる

地震や台風によって、電気や水道などわたしたちの生活に必要なライフラインが止まることがあります。さい害直後のこんな生活を送りこえるためには日ごろからそなえ、ときには、くふうした生活を送ることが必要です。

ライフラインがストップしたら、生活の中でどんなくふうをすればいいかな

くふう 1 おふろの水でトイレを流そう



くふう 2 ラップフィルムをしいて水あらいをなくそう



くふう 3 アルミかんを使ってひじょう用にランプを作ろう



くふう 4 ラジオからラジオからじょうほうを得よう



役に立ったグッズ ベスト20

「こうべからのメッセージ」生活協同組合コープこうべ編より

- | | | | |
|------------|--------------|-------------|-----------|
| 1. かい中電灯 | 6. トイレトペーパー | 11. 使いすてカイロ | 16. 飲料水 |
| 2. 食料品 | 7. 電池 | 12. カセットコンロ | 17. アルミはく |
| 3. ラップフィルム | 8. ウェットティッシュ | 13. 下着 | 18. 紙皿 |
| 4. ビニールぶくろ | 9. 手ぶくろ・軍手 | 14. 薬 | 19. 生理用品 |
| 5. 小型ラジオ | 10. 小げに | 15. 紙コップ | 20. ほうし |

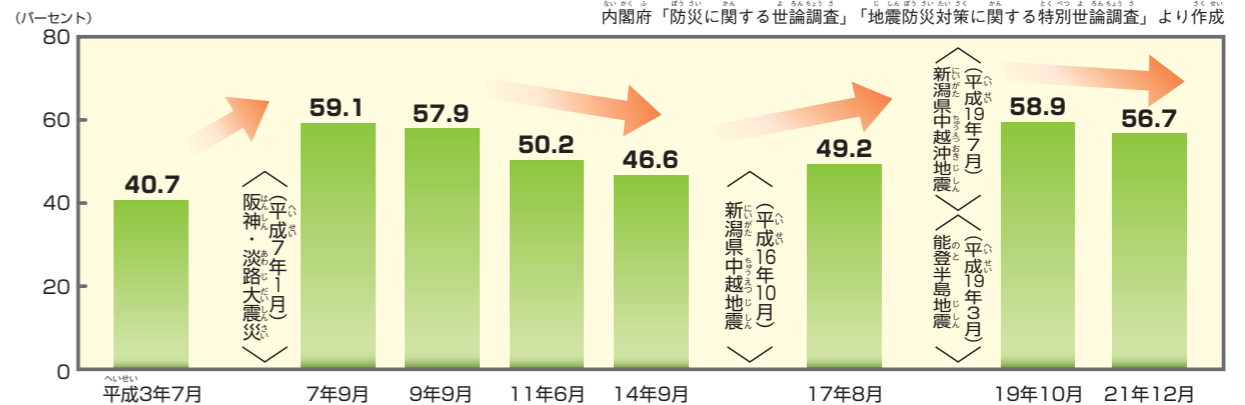
ライフラインのふっきゅうまでの日数



電気はふっきゅうが早いね。

大地震へのそなえ

大地震にそなえて「けい帯ラジオ、かい中電灯、医薬品などをじゅんびしている」と回答した人のわりあ



役に立ったものも特別なものは少ないね。ふだんのそなえをちょっとふやすのがいいかな。

地震の直後にそなえるけど、時間がたつと意識がうすれるわ。



何も考えられない

ぼくは、大きなきょうふが来るのも知らずにねていた。

ゴトゴト、ゴゴゴゴッ、ミシミシ、ドッカーン。ものすごいゆれとともに大きな音が聞こえてくる。ベッドの支えにしがみついた。

ゆれがおさまり、お父さんとお母さんが来た。

「服を着ろ。」

お父さんの声が聞こえる。余震が来た。もう何が何だかわからない。服を着てにげようとした。ガスのにおいがする。

「火が出るぞ。」

と、お父さんの声がした。ドカーン。音とともに火が出た。お父さんは、おばあちゃんを助けに行った。

ドンドン。

「佐藤さあん。」



だれかが思いっきりドアをたたく。部屋のドアを開けようとしたが、開かない。ベランダにまわった。すると、思いがけないことになっていた。2階が1階になっていたのだ。そこから、ぼくたちはにげだした。すぐ後に、お父さんがおばあちゃんを連れて出て来た。おばあちゃんは頭にやけどを負っていた。でも、家族全員にげられた。

家からはなれると、足がふるえだした。にげるまでは何も考えられなかったのだ。だから、今ごろになってふるえてきたのだ。

こわれたぼくの家から、けむりが上がっている。ぼくは消防車を呼びに行った。しかし、消防署にはだれもいない。しかたなく、また家へ走った。

家はまだ燃えている。近所の人を手伝ってくれている。しかし、火は消えない。お父さんは、必死で火を消している。ぼくは、お父さんが乗っている脚立を支えた。お兄ちゃんの手は血まみれだった。

昼過ぎ、火はやっと消えた。

南三陸にさく「はるかひまわり」

2011（平成23）年3月11日。ゆたかで美しい海に面した南三陸町歌津地区にも、大きな津波がおしよせ、あらゆるものをおし流し、いっしゅんにして多くの人命と人々の生活をうばいました。

ふっこうにはまだまだ時間がかかり、ひなん所での生活は津波で被害にあった人々の心に大きなかけを落とし始めていました。がれきがてっ去されたあと地は草木も生えていない、あれた野原になっていました。

牧野さんは、昔、歌津地区で町長をしていました。津波で大切な家族はゆくえ不明になり、そして変わり果てたふるさとのすがたに心をいためていました。

「何もかも流されてなくなってしまった……。」

牧野さんは、しんさいの後、大好きだった海を見ることができませんでした。

ある日、牧野さんは、

「新潟県中越地震のひさい地からゆずり受けたひまわりの種をまく場所はないだろうか。ふるさとが元にもどるには時間がかかる。だけど、このあれた風景のままなんてたえられない。」

と、知人の及川さんから相談を受けました。このひまわりの種は「はるかひまわり」とよばれていました。



1995（平成7）年1月17日の兵庫県南部地震により自たくがくずれ、神戸市の小学校6年生、加藤はるかさんがなくなりました。その半年後の夏、はるかさんの家があった空き地に無数のひまわりの花が、力強く、太陽に向かってさいていました。そのひまわりは、近所の人たちから、「はるかひまわり」とよばれるようになり、これまで新潟県など、さまざまなさい害のひさい地に種が送られ、花をさかせてきました。



「ふるさとを『はるかひまわり』でいっぱいになりたい。」

牧野さんは、さっそく自分の畑に種をまきました。地いきの人たちも種まきに加わりました。南三陸をひまわりでいっぱいになりたいという牧野さんの願いは、たくさんの人に伝わり、町じゅうにひまわりの種が配られました。ひなん所の人たちが小学校や中学校に種を配ったり、新聞配達をしている人が、一けん一けん種を配ったりしました。「はるかひまわり」の活動は、ひがいにあった人々の間につながりを生み、元気をあたえました。「南三陸町と気仙沼市を結ぶ約50kmの道路にそって花をさかせ、『ひまわりロード』をつくろう。」

牧野さんや及川さんは、となり街の気仙沼市の人々にもよびかけました。そのよびかけに、たくさんの人が集まり、ひまわりの種をていねいにまいていきました。



(写真提供 南三陸町観光協会)

夏になり、「はるかひまわり」は、^{みなみさんりく}南三陸町や^{けせんぬま}気仙沼市にたくさんの花をさかせました。

ひまわりは太陽に向かってまっすぐにせをのぼし、前を向いてさいていました。そして、たくさんのひまわりたちが、まるでおどっているかのようにそよ風に心地よくなびていました。

ひまわりのそばでは、子どもたちがえ顔で遊び、地いきの人たちが楽しそうに話をしていました。

^{まきの}牧野さんは、やわらかいまなざしでひまわり畑を見つめました。ひまわり畑の向こうには、青い海がきらきらとかがやいていました。



大津浪記念碑

「^{すまい}高き住居は^{こまご}児孫に^{わらく}和楽 想へ^{おも(え)さんか}惨禍の大津浪
^{ここ}此処より^た下に家を^た建てるな」

「^{ここ}ここより下に家を^た建てるな」と記す「^{おおつなみき}大津浪記念碑」は、^{いわてみやこあねよし}岩手県宮古市姉吉地区にあります。3000名近い^{しょうわ}ぎせい者を出した1933（昭和8）年に^{さんりく}三陸地方をお^{おつなみ}そった大津波の後、その^{たつ}とう達点よりさらに高い場所に^{じゅうみん}近りんの住民が^た建てたといわれています。2011（^{へいせい}平成23）年の^{とうほく}東北地方太平洋沖地震による^{つなみ}津波でさえ、この碑の手前で^{あねよし}止まり、^が姉吉地区では^ひ害をま^めめがれた方も多^かかったそうです。



^{おおつなみきねんひ}▲大津浪記念碑
(写真提供 東日本大震災写真保存プロジェクト)

何度も津波にお^{おつなみきねんひ}そわれている^{とうほく}東北地方では、「大津浪記念碑」のような碑のほか、近年最大の津波であった1960（昭和35）年の^{しんじつなみ}チリ地震津波の^{たつ}とう達点を記した^{ひょうじばん}表示板が各地に^{ひょうじばん}ありました。表示板は、^{ないりく}内陸深くまで津波が^{つなみ}しん入してくることを、津波を経験した^{じゅうみん}ことのない住民にも^{つた}伝えるためのものでした。

しかし、^{とうほく}東北地方太平洋沖地震による津波は、^{じゅうらい}従来の想定を大きく^{ひょうじばん}こえるものであり、多くの表示板が津波に^{つなみ}のまれました。

^{あねよし}姉吉地区の先ぞは、^{けいけん}当時経験したことも^{おおつなみ}ないような大津波の^{たつ}とう達点よりさらに高い地点に、「^{ここ}ここより下に家を^た建てるな」という^ひきびしい内よりの碑を^{のこ}残しました。想定や^{けいけん}経験を^{つなみ}こえる津波への^{しそん}そなえを子孫に語りつ^{ごう}ごうと考^ええたのは、^{たいけん}実さいに想^{ぞう}ぞうを^{たいけん}ぜつする体験をした人々^ただったから^{こそ}かも^しれませ^んん。

長い年月を^ここえて先ぞの^{けいけん}教えに^{けんきょ}けんきよに^{まな}まなぶこと、^じ想定や^{けいけん}経験を^ここえる^じ事態を^{たい}想定すること。い^づれも口でい^うう^ほほど^{かん}かん^{たん}単では^あありませ^んんが、^{しょう}しょう^{らい}来の^{がい}さい^{らい}害に^そそ^なえ^るるために^{ひつ}必要^なな^{こと}こと^では^ない^でし^{ょう}か。



お父さん

地震のすぐ後に、学校の運動場に避難しました。

「おばあちゃんの家を見に行こう。」

と、お父さんが言い、二人で走り出しました。板宿を過ぎてから、もう走れなくなりました。屋根のかわらが落ちていたり、たおれてきそうな家もたくさんありました。おばあちゃんは、お母さんのお姉さんと二人ぐらしだったので、余計に心配になりました。けむりくさいにおいもだんだん強くなってきました。

もうすぐで、おばあちゃんの家というところで、ぺっちゃんこの家がありました。そこのおばあさんが泣きながら、

「おすめを助けてください。お願いします。」

とさけんでいました。わたしは、通り過ぎようと思いました。すると、お父さんが、

「これ持っというて。」

と、ひとこと言ってから、わたしにジャンパーを投げて、ぺっちゃんこになった山みtainな家を登って行きました。わたしは、ふさがった道の真ん中につっ立っていました。

「おばあちゃんたちが、死んでたらどうしよう。死なないでよ。お願い」と思いながらも、どこかで「知らない人なんかより、おばあちゃんたちを先に助けてよ」と思っていました。すると、なみだが急にぽろぽろと出てきました。いつもだったらすぐになみだをふくのに、人にじろじろ見られていても全然気になりませんでした。

「見つかったぞ。」

という知らないおじさんの声で、なぜかうれしくなりました。お父さんが出てきたので、うれしくてほっとしました。

すぐにおばあちゃんの家に行きました。おばあちゃんの家を見ると、屋根が下がっていたので、家にはもういないと思い、千歳小学校へ走りました。体育館の中をさがしたけどいませんでした。すごく心配なので、もう一度、おばあちゃんの家を見ることにしました。すると、おばあちゃんとおばちゃんが、家の中にいました。げん関もつぶれていたの、お父さんがこう子戸の板をのけました。出てきてほっとしました。

今回の地震で、お父さんのやさしさ、たくましさを感じました。



(千歳小学校は2002年に大黒小学校と統合され、現在、神戸市立だいいち小学校となっています。)

さい害時に命を救う仕事

地震や水害など大きなさい害が発生したとき、何より大切なことは、人の命を救うことです。

2011（平成23）年の東日本大震災でも、多くの方がけん命に活動しました。

自えい隊

ひさい者の救助や、たおれた建物を取りのぞき道をつくる作業を行いました。また、給水車をはけんしたりかせつぶろをつくったりもしました。

ちゅうとん地のある秋田県を震災当日の夜に出て、早朝に岩手県に入りました。

ひさい地の様子を見て体が固まってしまいました。わたしがこれまでに見たことがない光景が広がっていたからです。「一人でも多くの命を救いたい」という思いがわたしをふるいたたせました。

毎日、どろの中を進む果てしない作業を続けましたが、思うように救助活動は進まず、と中で心が折れそうになりました。しかし、まだどろの中でわたしたちの助けを待っている方のことを思うと「自分のつらさなんてたいしたことない。自分たちが今がんばらないでどうするんだ。自分たちが今必要なんだ」と仲間たちと声をかけ合いながら、必死で救助活動を行いました。



(写真提供 産経新聞社)

第9師団第21普通科連隊（秋田県）

消ぼう

地震の後に発生した火さいの消火活動や津波でひ害を受けた家屋からの救助活動などを行いました。



(写真提供 産経新聞社)

けい察

救急車、消ぼう車をゆう先して通すきん急交通路のかくほやはんざい予ぼうのパトロールを行いました。



(写真提供 兵庫県警)

赤十字など

けが人や病人が次々と運ばれる中、全国から医しが集まって、治りょうに当たりました。



(写真提供 神戸新聞社)

海上ほ安ちょう

多くのしょう害物の中、長時間海にもぐり、津波で流された人たちのそうさくを行いました。



(写真提供 海上保安庁)

読んでみよう



阪神・淡路大震災のときに多くの命を救った地いきの助け合い

「この家は、ばあさんがげん関わきにねているぞ。」
「子ども部屋は台所の上だ。」



(写真提供 神戸新聞社)

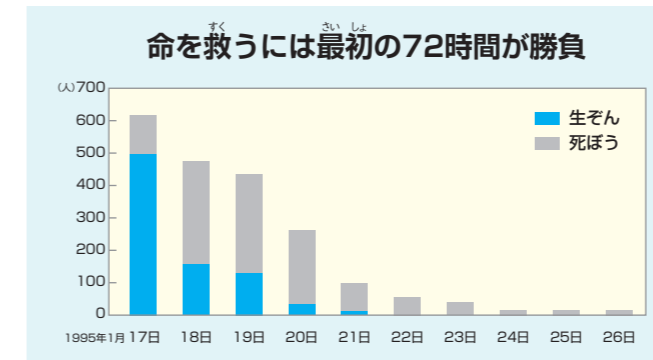
淡路島の旧北淡町は、兵庫県南部地震の震源地に近く、多くの建物が全半かいとなるひ害を受けまし

た。しかし、この町では、地いきの人が近所の家のじょうほうを持ちより、がれきの下で消えそうになった命を次々に助け出しました。そして、地震発生から約11時間後、自えい隊がとう着するまでに、生ぞんしていた人、なくなった人、すべての救出を終えていたそうです。

地震の直後、このような助け合いは各地で行われました。阪神・淡路大震災ではかいされた家屋から救出された35000人のうち、27000人は近所の住民に救出されたといわれています。

さい害時の救命救助はスピードが大切です。最初の72時間（3日間）がかぎといわれています。しかし、大地震のときは、各地で同時に生きうめになったり出火したりするので、ひさい地の消ぼうやけい察だけでは救命救助の人数が足りません。全国の消ぼうやけい察のおうえんのとう着は早くても2日目、3日目となります。

このようなじょうきょうで、多くの命を救うのは住民の助け合いです。消ぼうやけい察が十分



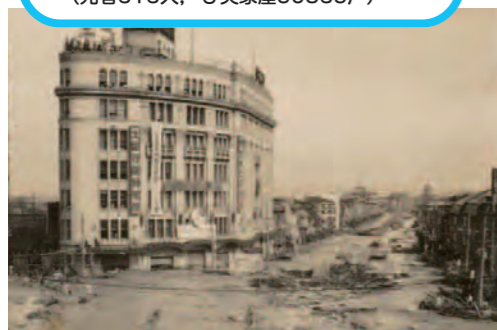
阪神・淡路大震災 神戸市消防局の対応

につかんでいない家族のじょうほうも、近所の住民なら知っていることがあります。日ごろから地いきの人とつながりをもっていけば、いっそうの防災・減災につながるしょう。

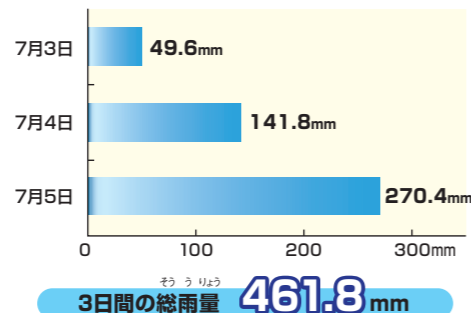
兵庫県ひょうご きょうしゅう すいがいの気象と水害

日本列島の大部分の気候の特ちょうとして、初夏のつゆと、夏から秋の台風があげられます。つゆや台風は、ときに大雨をふらせ、川のはらんなど水害を起こすことがあります。

1938年7月3～5日 阪神大水害
(死者616人、ひ災家屋90569戸)



▲三宮の状況(神戸市中央区) (写真提供 人と防災未来センター)



2004年10月20日 台風23号水害
(死者95人、ゆくえ不明者3人、ひ災家屋75056戸)

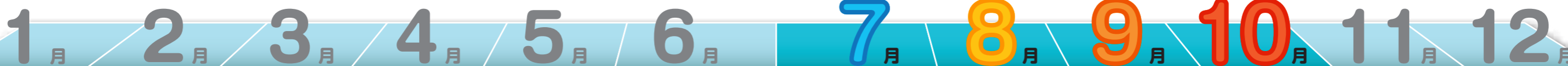


▲豊岡市 (写真提供 神戸新聞社)

2009年8月9日 台風9号水害
(死者26人、ゆくえ不明者1人、ひ災家屋6948戸)



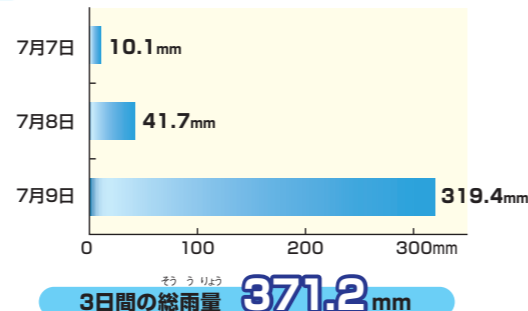
▲佐用町 (写真提供 神戸新聞社)



1967年7月9日 昭和42年の大水害
(死者77人、ゆくえ不明者15人、ひ災家屋38305戸)



▲神戸市中央区 (写真提供 神戸新聞社)



2011年9月4日 台風12号水害
(死者78人、ゆくえ不明者16人、ひ災家屋28439戸)



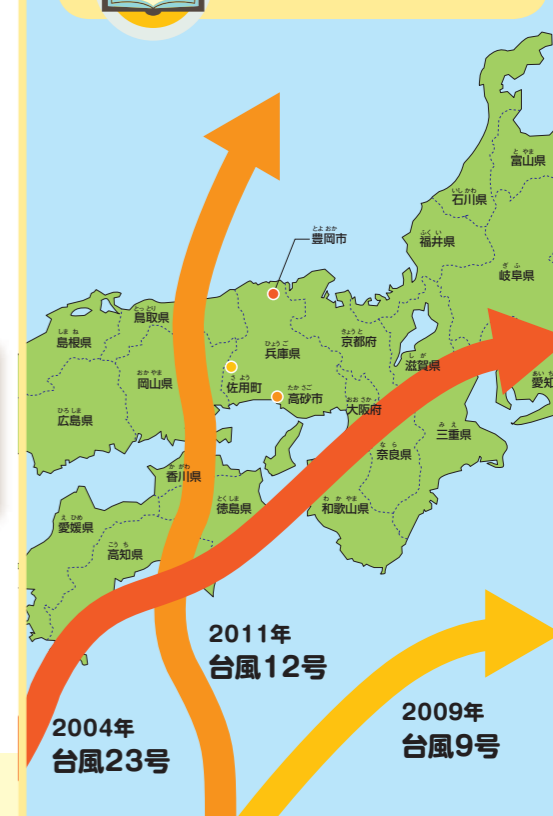
▲高砂市 (写真提供 神戸新聞社)

水害は地形との関係が深いようだね。

台風が遠くを通っても油断できないね。

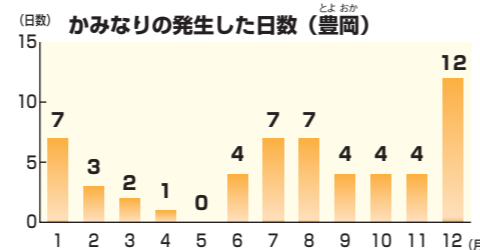
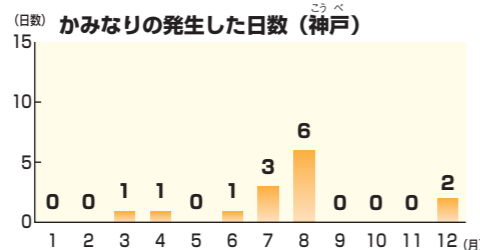


台風の経路図



兵庫県の気象 — 日本海側の冬のかみなり —

かみなりは夏の入道雲の時期に多いと思われていますが、日本海側は冬場に多い傾向にあります。



気象庁の観測データ(2005年)による



ぼくは一人じゃない

地震が起きたとき、暗やみの中で妹と弟は泣いていた。ぼくは、たおれた家具からぬけ出せなくてあせっていた。お父さんは一番に起き上がり、ひ難のためにドアを開け、大声で子ども3人の名前をよんでいた。お母さんは、たおれてくる家具や落ちてくる電灯から弟をだきかかえて守りながら、妹に、

「だいじょうぶよ。」

と声をかけていた。ほんとうは、お母さんもこわかったんだろうけど、ぼくたちがこれ以上不安に思わないようにがんばっていたのだと、後でわかった。それは、次の日、おばあちゃんの家で電話が通じたとき、泣いていたからだ。

お父さんは、ぼくを助け出してくれた後、家族を1階まで連れ出し、「まだ寒い。外にいるとだめだ。」

と言って、余震がいつ来るかわからない中を、また12階まで車のキーを取りに上がった。今度地震が来たら、この建物がたおれるんじゃないかと思うと、お父さんのすがたが見えるまですごく心配だった。

その後も、お母さんは食料集めに走りまわり、お父さんは身のまわりの物を取りに行くなどして、1日が、あっと言う間に過ぎていった。

そして、両親がいそがしくしている間、妹と弟が、ずっとぼくのそばにすることに気がついた。いつもはけんかをするけれど、妹は、夜もぼくの手をにぎってねる日が続いた。妹や弟がぼくをたよりにしていると思ったとき、家族の大切さがわかった気がした。

それから、2週間ほどたったころ、ぼくたちは、おじいちゃんの家に行



行った。そこで、おじいちゃんもおばあちゃんも、おじちゃんもいとも、みんなぼくたちのすがたを見て、安心してくれた。おじいちゃん

は、「ガスも水道も出るようになるまで帰るな。」
と言ってくれた。ここにも、ぼくたちのことを心配してくれる人がいるんだと思った。

学校が再開すると、先生や友達も来た。

この地震によって、ぼくには、たくさんの人が、いつもそばにいてくれることができた。

学校再開

震災後、1か月ほどして、ほとんどの学校が再開しました。先生や友達は、手をとりあって再開を喜び合いました。

卒業式や入学式は、運動場や教室などで行いました。ひ難生活を送っている人たちに祝ってもらいました。



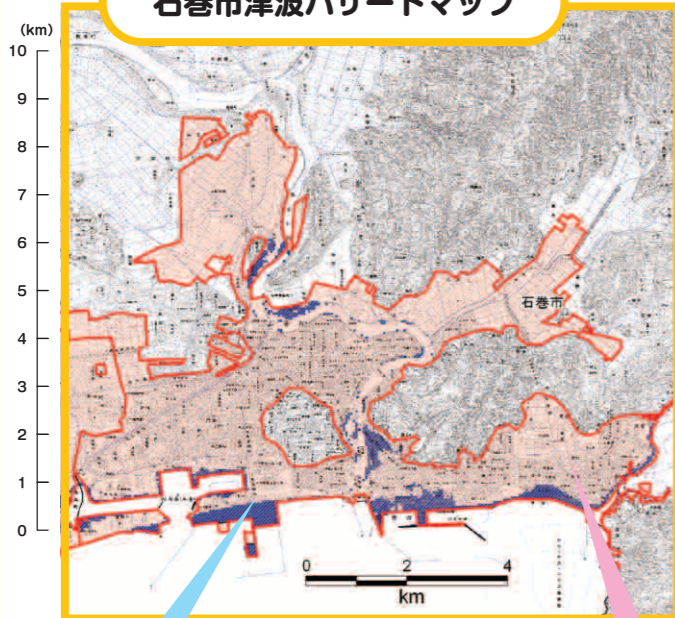
想定や経験をこえた東日本大震災

東北地方をおそった津波

2011（平成23）年3月11日、太平洋三陸おきで発生した東北地方太平洋沖地震は、長さ約500km、幅約200kmという広い震源域をもつプレート境界型地震のため、それまで想定されていたマグニチュード7.5の約180倍の大きさの、マグニチュード9.0の大地震になりました。

岩手・宮城・福島^{ふくしま}の3県の広いはん囲に10mをこえる津波が来て、岩手県宮古市重茂姉吉地区では、津波が40mの高さまでかけ上がりました。湾の中で、津波がより大きくなったといわれています。

石巻市津波ハザードマップ



（内閣府東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会の資料による）

石巻市の地形図



ハザードマップで青くぬられた部分は宮城県石巻市で、想定されていた津波でしん水するはん囲です。

しかし、想定をこえる10mの大津波が来たため、赤色にぬられた街の大部分がしん水しました。

左上のハザードマップで赤色にぬられた津波によりしん水した部分と、右上の地形図を比べてみて、何がわかるかな？



福島第一原子力発電所の事故

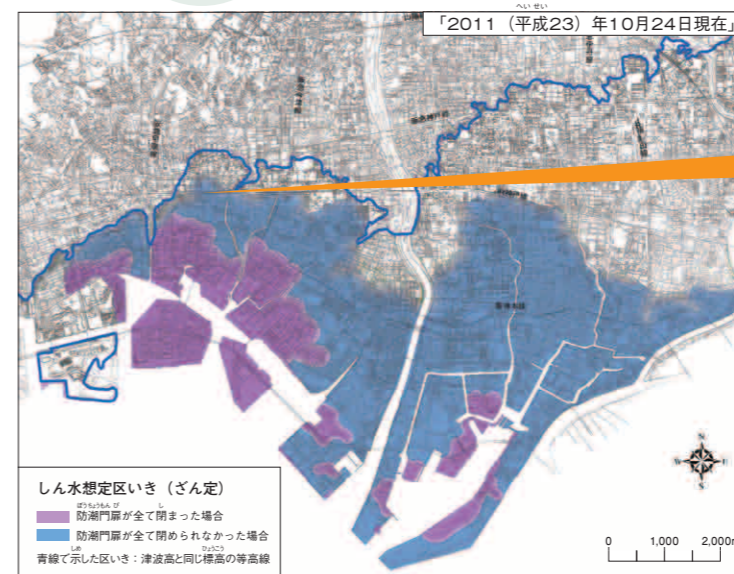
福島第一原子力発電所では、地震と津波のえいきょうで事故が起こり、放射能物質が放出されました。この周りには、多くの人がひなんし、不自由な生活を送っています。また、広いはん囲で農業などの産業にえいきょうが出ています。ひ害のかく大や同じような事故の再発の防止のため、2012（平成24）年2月現在、調査が進められています。



▲福島第一原子力発電所 (写真提供 産経新聞社)



兵庫県津波被害警戒区域図（平成23年10月暫定）



▲西宮市街（海から約1400m）

多くの市町では災害を想定したハザードマップを公開しているわ。

災害は、想定をこえることもあると考えて行動することが、命を救うことになるんだよ。



東日本大震災の教訓をふまえて、兵庫県では、これまで想定していた津波の高さをざん定的に2倍程度とし、その津波高と同じ高さの等高線をけいかい区いきとして作成しました。実際に津波がおよぶはん囲は、地震の大きさにより、これを上回る場合も、下回る場合もあるので注意が必要です。ひ害の想定については、平成24年中にも見直され、こう新されていくことになります。





とも ささ あ 共に支え合って

「ドーン。」

1月17日、午前5時46分、とつぜんの大きな大地のゆれに、人々はねむりから覚まされた。

まだ夜の明けきらぬうち、人々はくずれ落ちた家から外へ出て、ゆくのわからぬ家族の名をさげんだ。あまりのことに、人々はまだ状きようがつかめなかった。せまり来るほのお、くずれた高速道路、かたむき、今にもたおれそうなビルの群れ、水道もガスも止まったまま。電気も使えない。

明るくなるにつれて、ひ害のとてつもない大きさが、だれの目にもはつきりとわかってきた。死者5500人余り、そしてひ難者は30万人。戦後最大級の阪神・淡路大震災に、神戸のまちはおそわれたのである。

「あの学校ではいったい何をしているのだろう。」

「どんな人がいるのかな。」

地いきの人々は、そう思いながら校舎をぼんやりとながめるだけで、一度も足をふみ入れたことのない人がほとんどであった。ただ、自分たちは国籍のちがう子どもたちが通っていることは知っていた。

その東神戸朝鮮初・中級学校に、今は約100人の日本人と約50人の在日朝鮮人がいっしょにいる。共同のひ難生活だ。家を失って行き場のない人々に、

「校庭を自由に使ってください。」

と、学校がよびかけたのだった。

(数字については「明日に生きる」原文のとおり)



「今から、おにぎりときムチを配ります。」

その声に人々は集まってくる。

「わたしたちは日本人やけど、もろてもええのかな。」

「同じ人間やないですか。」

各地の在日朝鮮人から物資がとどく。それらの物資は、日本人、在日朝鮮人にかかわらず、同じように分けられた。

「つきあいがなかったのに、何十年來の友人のように助けてくれる。」

と、日本人から感謝の声があがった。

地震発生から数か月がたった。町もだんだんと復興してきた。人々の生活にも活気がよみがえってきた。やがて、日本人がこの学校の校庭から去る日も近いことだろう。震災という悲しいできごとではあったが、それを、共に助け合うことで乗り越えたこの校庭でのできごとは、人々の心から消えることはないだろう。

また、ひ難所となった小学校や中学校などのいたるところで、多くの日本人が、さまざまな国籍の人々と、共に支え合いながらひ難生活を送った。

き険な空間を減らそう



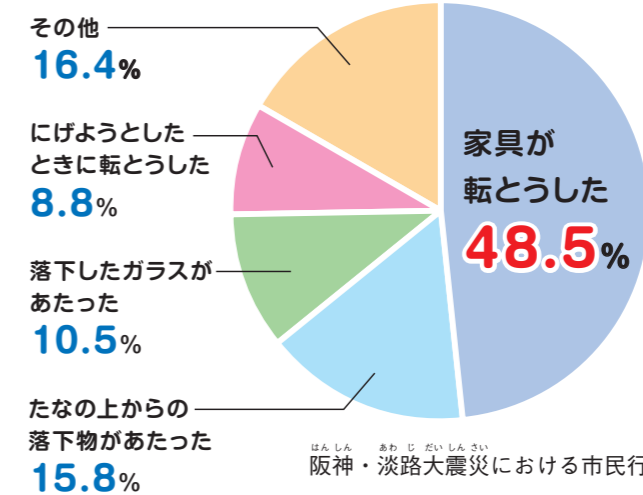
いろいろとくふうがしてあるね。

でも……。



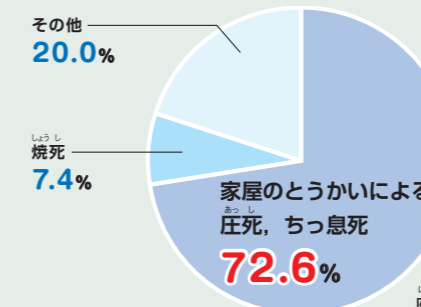
阪神・淡路大震災のけがなどの原因

けがの原因



阪神・淡路大震災における市民行動調査 (神戸市消防局)

人がなくなった原因



少しでもき険を減らすには、1階より2階でねるほうが安全だよ。

阪神・淡路大震災の死者にかかる調査 (2005年兵庫県)

身の回りのもので応急手当ができます

⊕ 出血があるとき

- 出血しているきず口をガーゼやハンカチなどでおさえて、しばらく圧ばくします。この方法が最も基本的で確実な方法です。

▼使えるもの
ガーゼ、ハンカチ、タオル



⊕ ねんざ、こっ折かもしれないとき

- いたいところを動かさないように固定し、少し高い位置にして冷やします。

▼使えるもの
だんボール、雑し、新聞紙、木材、タオル、ロープ



⊕ やけどをしているとき

- すぐに流水などでいたみがとれるまで冷やします。皮ふをきずつけるので、衣服はぬがなくてそのまま冷やします。
- きれいなタオルでおおっておきます。

▼使えるもの
タオルなど



参考

人を運ぶときたんかが役立ちます。

服や長いぼうがあれば、たんかが作れます。



▼使えるもの
ものほしざお、服



何かしたい 役に立ちたい (小学生が行った避難所ボランティア)



ぼくたちにできること

ぼくの家族は、1年1組の教室で、34人の人たちといっしょに避難生活をしている。着るものも食べるものもあまりないけど、みんなで分け合って協力している。

ぼくも食べ物をもらいに行っている。初めの3、4日はあっという間に過ぎたけど、その後、ぼくはこれでいいのかなと思うようになってきた。小学校には、たくさんの子どもが避難してきているが、みんなで集まってすることがない。小さい子は、ぼくら以上にたいへんだらうと思って、ぼくたちにできることはないか考えた。そこで、先生に、

「紙しばいをしようと思うんですけど、どうですか。」と聞いた。

「自分たちでやろうと思うことは、どんどんやれ。」と言われたので、小さい子を集めて、今やっている。

毎日、ほんの20分くらいだけど、3才から低学年くらいの子が集まって、真けんに聞いたり、おもしろいところでわらったりするすがたを見ていると、ぼくたちもやってよかったと思う。



(写真提供 神戸新聞社)

給水車が来ました

地震の後 水が出なくなった
みんな こまった
給水車が来るのを 今か 今かと待っていた

給水車が来た
でも マイクの音が みんなには聞こえない
白転車で 知らせてまわることにした

「給水車が来ました
給水車が来ました
中公園の西出入口に集まってください」

はじめは はずかしかったけど
言っているうちに 慣れてきた
それどころじゃない
だんだん 楽しくなってきたんだ
近所のおばさんに
「いつも ありがとう」と 言われた
てれくさかった

水が出たときは うれしかったけど
この仕事 もう少し 続けたい気もした



災害後の生活に求められる「公平さ」

たくさんの方がひなんしているひなん所には、ルールが生まれます。一つ一つのルールが、なぜ、できたのかを考えてみましょう。ルールができることで、みんなの生活には、どんな変化があるのでしょうか。

阪神・淡路大震災のときにひなん所となったある中学校での「共通理解ルール」

○	夜11時に消灯する。校舎内は火気げん禁とする。
○	<p>食料などの配給について</p> <p>(1)食料などは以下のゆう先順で配る。</p> <p>①校舎内にひなんしている人 ②近所の公民館などにひなんしている人 ③近所の住民</p> <p>(2)配給は全員に配給できるまでしない。どうしても配給する場合は、代表者を集めて理解と協力を得てからにする。</p> <p>(3)近所の住民への配給は最低限にする。</p>
○	高れい者やしょう害のある人への配りよをする。
○	犬やねこなどの動物は校舎に入れない。
○	ひなん所を出て家等で生活をする場合は、代表者と本部に伝えてから出る。

どうして近所の人にも配給しないんだらう？



このようなルールは、一部を変えながら東日本大震災のひ災地のひなん所でも引きつがれたんだよ。



東日本大震災のときのひなん所のルール 例

配給は全員に配給できるまでしない。

全員に配給できない場合は、ひなん所内の家族などを単位として公平に配る。

トイレでは大便のみバケツの水で流す。

大便は校内のトイレではしない。外の仮設トイレで行う。

仮設住たくて、ペットはどうすればいいの

ペット同はん、われる対応 仮設住たくて自治体

震災ひ災者の仮設住たく建設が進む陸前高田市で、ペットを飼う入居希望者が頭をなやませている。市は住民トラブルや衛生面を考りよし、動物連れ入居を原則禁止する方しんだからだ。一方、釜石市は容にんする方しんと対応は分かれそう。阪神・淡路大震災で神戸市も「ひ災者の制約をなるべく軽減しよう」とペット連れ入居を禁止しなかった。



(写真提供 神戸新聞社)

「ペットは家族の一員」「心の支えになる」。ひ災した飼い主の思いにどこまでこたえられるか、各自治体はむずかしい判断をせまれそうだ。

「メメは大切な家族の一員。放すわけにも殺すわけにもいかない」。仮設住たくへの入居を希望する夫婦は苦しいむねの内を明かす。

3月11日の地震発生時、9さいになるチワワのメメを連れて高台にひなんした。家族にいつも安らぎをあたえてくれるそん在。ひなん所には入らず、し設うら手の自家用車の中で愛犬といっしょにひなん生活を送る。

「愛情を注ぎ9年もいっしょに生きてきた。どうしても仮設でだめなら車で飼うが、それもかわいそう。もう少しじゅうなんに考えてほしい」と願う。

市は、動物が苦手な人とのトラブル回ひや衛生面などを考りよし、ペット連れの仮設住たく入居を原則禁止と決めた。「仮設住たくはみっ集しており、鳴き声やふん、衛生などさまざまな問題がある。飼い主の気持ちはわかるが、遠りよしてもらいようお願いする」と理解を求め

る。一方、釜石市では「他人に迷わくをかけないのが前提だが、このような事態だし、アニマルセラピーも必要ではないか」とみとめる考えだ。他市町村の多くは対応を検とう中だが、大船と渡市では「市営住たく条例にならえば禁止とするところだが、ひ災者の心のケアの問題もある。動物にいやしを求める人も多いのではないかと語る。

(2011年4月4日 岩手日報)



わたしにとっては家族といっしょだけど、周囲の人に迷わくをかけることもあるのかな？



おばあちゃん 風呂に入りよ

ぼくの家は、市営住宅の11階です。地震の日から、半月以上断水が続き、毎日、何度も何度も、給水車まで水をくみにいかなければなりません。とてもしんどい仕事でした。

水くみを始めてまもなく、ぼくは、あまり会うことがなかったとなりのおばあさんを、何度も見かけるようになりました。おばあさんは足を引きずりながら、小さなやかんを持って来ていました。足が悪く、いたらしく、小さなやかんもたいへんな様子でした。ぼくは、「足が悪いのに、つらいやろうな」と思いながら、「水をくんできませんか」の一言が、なかなか出ませんでした。

ある日の夕方、近所のおばさんが、となりのおばあさんのために水くみをしているすがたを見て、「自分もたいへんなのにすごいなあ」と思い、家に帰って、母にこのことを言うと、

「助け合うのは当たり前やろ。何で手伝ってこんかったんや。」

と、おこられてしまいました。

それから何日かして、いつものように水くみのために下へ下りていくと、となりのおばあさんも小さなバケツを持って下りてきました。母が、おばあさんを見かけて、

「お風呂に入ってる？」

と聞くと、おばあさんは、

「ずっと入ってないわ。だから、体が気持ち悪うて。」

と答えました。それを聞いた母は、

「風呂に水をはってあげるから、わかして入りよ。」

と言いました。

「風呂いっぱいの水はたいへんやから、いいよ、いいよ。」

と、おばあさんはことわりでしたが、顔がとてもうれしそうでした。

母とはよく口げんかをしますが、そのときは、母をそんけいしました。

ぼくは、家の水くみでつかれていましたが、

「ぼくも、くむわ。」

と母に言うと、

「当たり前やろ。早うポリ容器持っといで。」

と言われました。

20リットルのポリ容器で、風呂をいっぱいにするのはたいへんでした。母といっしょにがんばっていると、弟や近所のおばさんたちも、バケツを持ってきて手伝ってくれました。風呂に水を入れるたびに、おばあさんは、

「ありがとう。ありがとう。」

と、くり返し言いました。それを聞くと、「もっとがんばるぞ」という気になりました。

よく朝、おばあさんが家に来ました。

「きのうは、久々にお風呂に入れて、とても気持ちよかった。ほんとうにありがとうさんでした。」

と、声をつまらせながら、何回も何回も頭を下げて帰って行きました。そのとき、心の底からうれしさがこみ上げてきました。



二つの大地震

日本の国土面積は世界の約0.25%、海洋面積は世界の約1%ですが、世界のマグニチュード6以上の地震の約20%は、日本の周辺で起こっているといわれています。このように、地震は世界のどこでも発生するわけではなく、日本のようなプレートがしょうとつし、しずみこみを起こす地域に集中しています。大きな被害のあった阪神・淡路大震災と東日本大震災について調べ、兵庫県で、今後、どのような地震に備える必要があるか考えましょう。

兵庫県南部地震を起こした野島断層 (活断層型地震)

兵庫県南部地震は、1995(平成7)年に淡路島を震源地として発生し、6434人がなくなりました。大都市に近い陸地の真下で起こったため、家屋の「層破かい」、神戸市長田区で発生した大規模な火災などにより、多くの方が命や財産を失いました。

この地震は、淡路島の野島断層が動いて起こりました。六甲山は、このような断層の動きによりつくられてきており、この地震で12cm高くなったといわれています。一つの活断層は約1000年に一度大きく動くといわれています。



▲野島断層(写真提供 人と防災未来センター)



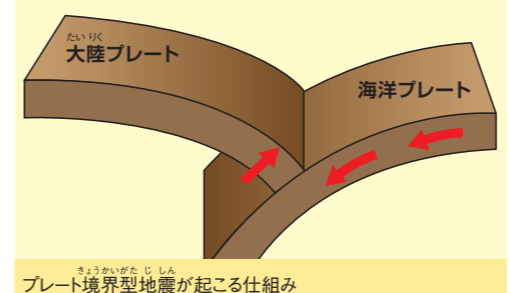
なくなった方の約73%が
圧死・ちっ息死なんだよ。
大きな地震のためすぐに家屋がつぶれ、その下じきになったんだね。

兵庫県南部地震では、強いゆれが20秒程度、弱いゆれもふくめると全部で40秒程度続いた。

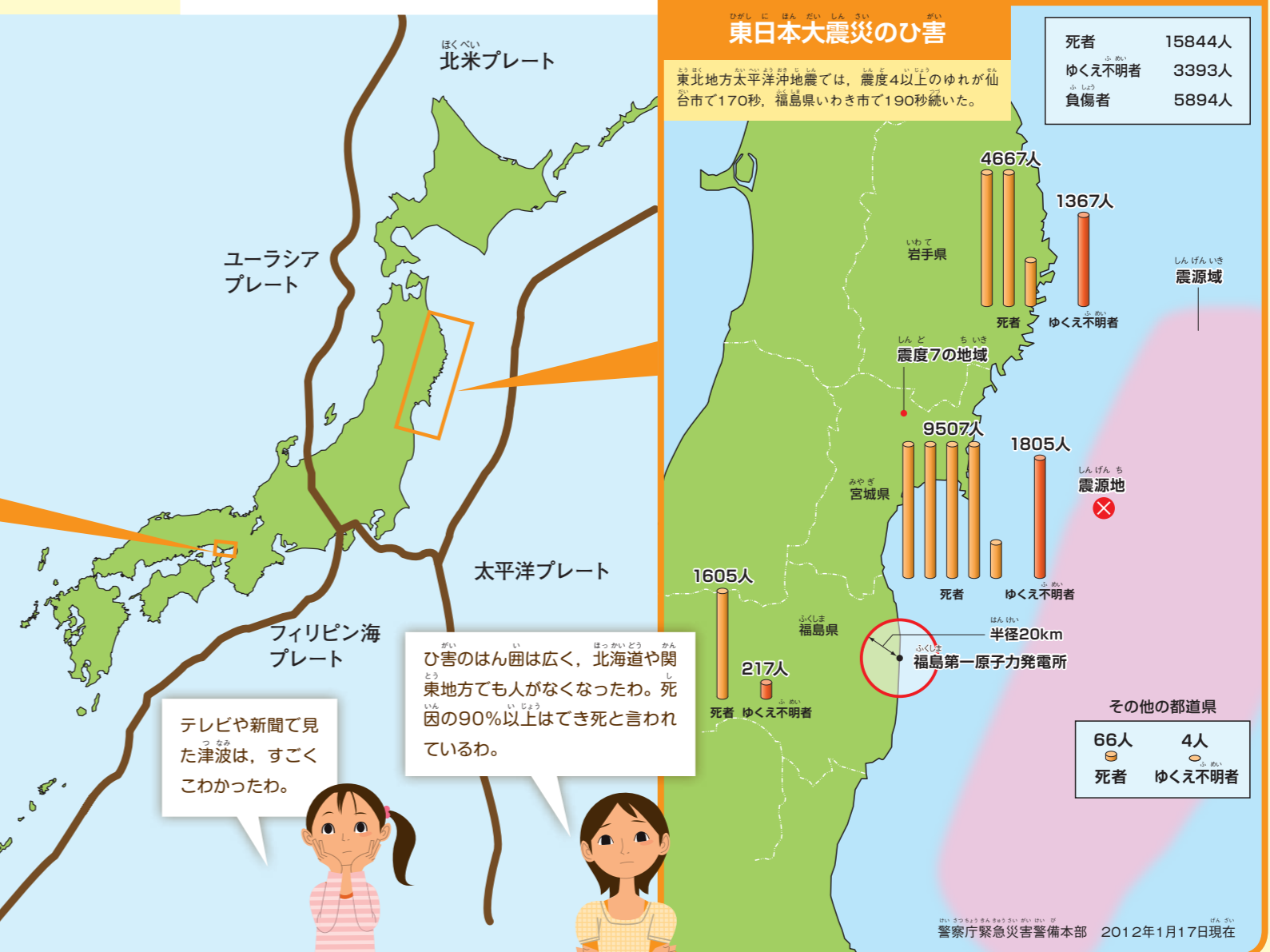
東北地方太平洋沖地震を起こした海底のプレート (プレート境界型地震)

東北地方太平洋沖地震は、2011(平成23)年に日本の東の海底で、長さ約500km、幅約200kmという広いはん囲を震源域として発生しました。東北地方の広いはん囲を10m以上の津波がおそい、なくなった人、ゆくえ不明になった人をふくめて約2万人にのぼりました。

また、地震やその後起こった津波のえいきょうで、福島第一原子力発電所で事故が起こり、放射性物質が放出されました。多くの方が避難し、不自由な生活を余ぎなくされています。



日本は、プレートの境界近くにあります。大地をのせたプレートは動いており、海の底にあるプレートの境目や、本州や淡路島にある断層にひずみのエネルギーがたまると、ときどきそれが解放されて地震が起こります。東北地方では、過去100年ほどの間に、明治時代と昭和時代にも大きな地震と津波におそわれました。



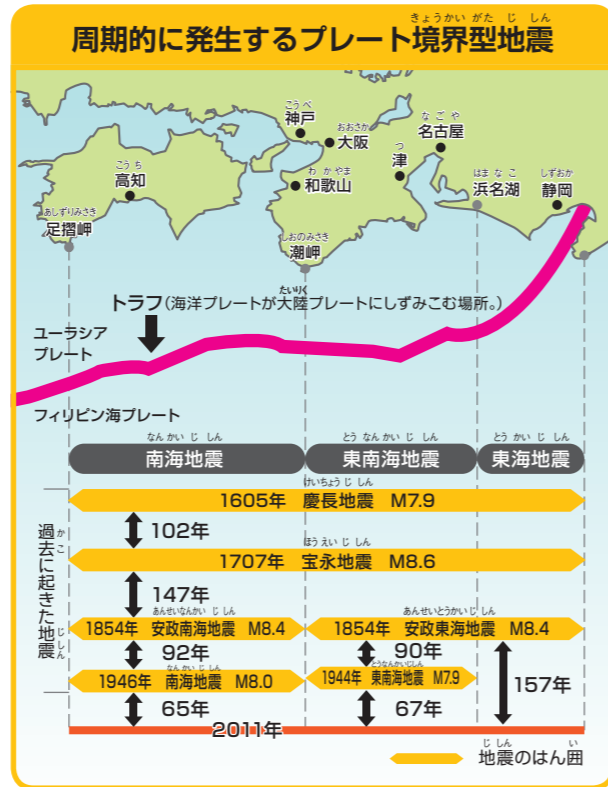
テレビや新聞で見た津波は、すごくこわかったわ。

ひ害のはん囲は広く、北海道や関東地方でも人がなくなったわ。死因の90%以上はてき死と言われているわ。

兵庫県活断層分布図とプレート境界型地震の歴史



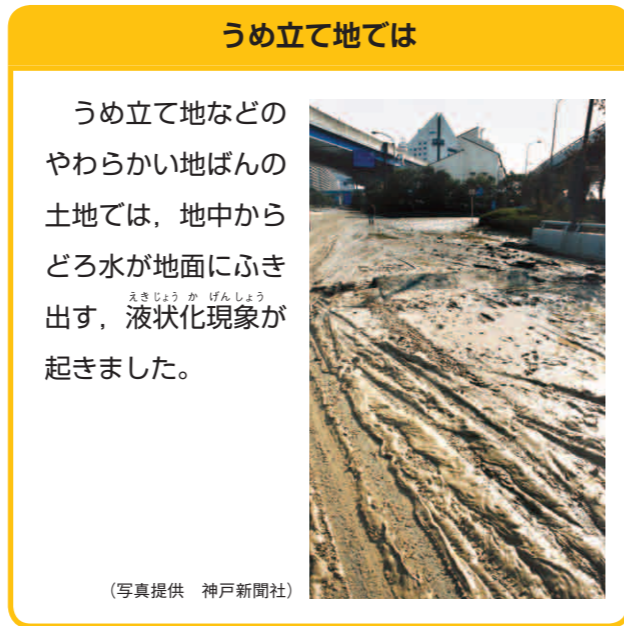
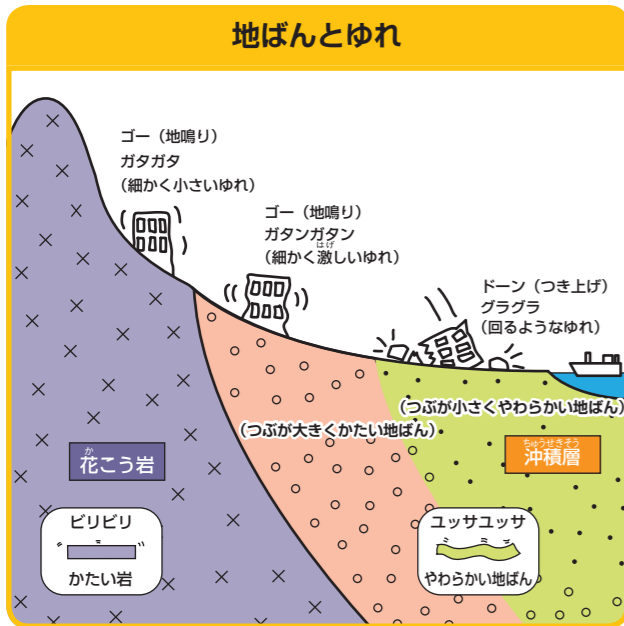
今後、動くと考えられる断層を活断層といい、兵庫県やその近くにも数多くあります。



慶長地震はゆれが小さいのに大きな津波が来て、多くのぎせい者が出たといわれています。

土地の様子と災害

兵庫県南部地震で、震度7を記録したのは、断層の上ではなく、沖積層といわれるやわらかい地ばんの上でした。沖積層は、川の水などによって運ばれてきた土や砂などが、積もってきた土地です。



読んでみよう



まぼろしの白石村

淡路島には『淡路温故之図』という古い地図が伝わっています。

この地図は淡路島をうまくえがいているのですが、現在の淡路島と見比べると島のかたちが少しちがいます。『淡路温故



▲『淡路温故之図』(淡路市立津名図書館)

之図』には、南あわじ市の灘地区から沼島に向けて、現在存在しない土地がえがかれています。そして、この土地にあった白石村ほか5つの村が室町時代の明応9(1500)年の大地震でしずんだと記述されているのです。この大地震、一体どんなものだったのでしょうか。

淡路島が関係する大地震としては、まずはプレート境界型の南海地震があります。明応7(1498)年の南海地震は静岡県浜名湖を海とつなげたといわれますが、『淡路温故之図』はこの地震のことをいっているのでしょうか。

また、淡路島と沼島の間には中央構造線が走っており、この断層の起こす地震などが高さ300m以上のがけをつくってきました。白石村をしずめたのはこの活断層が起こした地震だったのでしょうか。

かつて白石村があったという話は南あわじ市灘地区には長く伝わっており、



▲海に面したがけ(南あわじ市灘地区)

海がすんでいる日には海底に神社の鳥居が見えるという漁師もいるそうです。そんな土地をしずめる大地震なんてちょっと想像できませんが、そもそも自然の力の大きさというのは人間の想像をはるかにこえたものかもしれませんね。

12時にサイレンが町中に ひびいた

もくとうをするから目をつぶった
あおいのことを思い出すと泣きたかった
でも泣きたくなかった
わたしは学校の校舎こうしゃにいる
わたしは中学校に はいったりするんだ
でも あおいとかつやは中学校に はいらない
はいれないんだ
ずっと あおいは十一才じゅういちさいでいるんだ
あおいとほっとても仲なかが良かった
でもけんかもした
会あいたい

また遊びたい
いっしょにバレーしたい
話をしたい
あおいはひよこつと顔だしてこないかな
声をかけてくれるんじゃないかな
「ゆりちゃん」
あおいがよんでくれそうな気がする
わたしは あおいのことをわすれない
そういえば あおいは
わたしの身長をぬくって言ってたっけな
わたしはぬいてほしかった

一九九五年二月一七日

あの日から一か月



しゅん時の判断 救った命

2011（平成23）年3月11日、午後2時46分、マグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震。岩手県釜石市の釜石東中学校の生徒たちは、何度も行ってきた合同避難訓練どおり、鵜住居小学校の児童の手を引いて避難しました。津波で校舎3階までしん水しましたが、校内にいた全員が無事に避難することができた中学生の行動を追ってみましょう。



1 14時46分～50分 「ゆれが長いし、強い。校舎つぶれるかも」

足が海の方へ引っ張られるように地面が大きくずれた。3年生の菊池さんは、プレート境界型の地震だから津波がくると直感した。

グラウンドに整列しようとする生徒に、先生たちが「にげろ」「走れ」と声をかけた。

3年生の山本さんは、みんなが校門の方へ走り出すのを見て、全速力で駆け出した。鵜住居小では、津波のとう達が早いかもしれないと判断し、児童を校舎3階に避難させていた。しかし釜石東中の生徒が走るのを見て、校外へのゆう導を始めた。



2 14時50分～15時 「全速力で校門の外へ。小学生といっしょに」

菊池さんは、鵜住居小をすぎた辺り、大津波警報を知らせる防災無線を聞いた。この辺りは津波が大きくなりやすい地形だから、指定されていた避難所のございしょの里も危ないと思った。

山本さんは、ございしょの里に訓練より早く着いた。標高は学校と数メートルしかがわらないし、川の近くなので、津波がさかのぼってくるのではないかと思った。



3 15時～15時10分 「がけくずれが起きている。とんでもないことが起こる」

小学生もございしょの里に向かっていった。着いた者からございしょの里で整列した。

学級委員の点呼の後、菊池さんは、がけくずれも気がかりだった。クラスメートと、「ここは危ないよね」と話し合った。「もっと上に上げたほうがいい」と心配する声が聞こえた。



4 15時10分～ 「もっと上に。高台へ走る」

ございしょの里に小中学生が全員避難した。

「ここも危ない」先生から、「中学生は小学生一人と手をつないでここより高台のやまざきデイサービスに上げて下さい」と指示が出た。

菊池さんは、4年生ぐらいの男子と手をつないで出発した。ゴゴゴという音を聞いた。小学生には、「だいじょうぶだからね」と声をかけながら速足で歩いた。



▲やまざきデイサービス (写真提供 浦山文男さん)



▲「ございしょの里」を出発し、手を取り合って避難する児童・生徒 (写真提供 高村幸男さん)



5 15時17分～30分

「ふり返るとけむりが見えた」「街がない。走れ、走れ」

列の前の生徒が走り出した。山本さんも走りながらふり返ると、海の方にけむりが見えた。デイサービスのちゅう車場にと到着すると、津波が街をのみこんでいくのが見えた。

菊池さんは、ちゅう車場で男子生徒がさわぐのを聞いた。次のしゅん間、海の方を見て、街がないことになんかとした。

「にげろ！ 自分の命は自分で守るんだぞ」と先生がさげんだ。恋ノ峠の手前に急な坂がある。幼い子ども二人の手を引く母親に気づいた生徒が一人をおぶった。サッカー部の生徒は、保育所の子どもを乗せた手おし車を職員に代わっておした。

最初に避難していたございしょの里が津波にのまれたのは、全員がはなれて約5分後のことだった。



6 15時30分～

生徒たちは恋ノ峠にたどり着いた。津波はやまざきデイサービスの手前で止まった。

ひらの 平野校長の言葉

今回のことは「釜石のきせき」と呼ばれていますが、わたしたちにとっては「きせき」ではありません。日ごろの訓練や学習があったからこそ、想定外の津波にもかかわらず無事に避難することができたのです。そのことを兵庫のみなさんにわかってほしいと願っています。



▲鵜住居小学校の校舎につきさった自動車 (写真提供 毎日新聞社)

毎日新聞(2011年8月12日)の記事をもとに、二人の中学生の様子を中心に釜石東中学校の生徒の行動を追いかけてきました。



悲しみを乗り越えて

初めに、この震災でなくなられた全ての方々のごめい福をおいのりします。

1月17日、今思い出してもこわいあの日のこと。ぼくにとってはもちろんのこと、父や母、そして、祖父母にとってさえ、生まれて初めて経験した大地震。

たったの十数秒間ゆれただけで5000人をこす人々がなくなり、交通もうや水道、ガス、電気がたたれ、町がこわれてしまったなんて、どうしても信じられません。夢ではなかったのだろうか。

悪い夢を見たのだったらいいのにとおもっても、一步外へ出ると、ゆがんだ道路、こわれた家々、さまよいひ難する人たち……。

太陽は明るくかがやいているのに、六甲山や甲山はいつもと変わらないすがたを見せているのに、そして、浜や夙川には、今年も来た水鳥たちがにぎやかに群れているのに、こういうところを見ていると、よけいに悲しくなってしまう。

ぼくは、なんだか、心にぽっかりあなが開いてしまったような気がします。

どうして、ぼくたちの町はこんなにもあれ果ててしまったのだろう。どうして、こんなにも大勢の人たちがなくなってしまったのだろう。

考えても考えてもなっとくがいきません。

1月30日、学校が再開され、授業が始まりました。久しぶりに友達と会えた喜びもつかの間、それからのほうが、何だかさびしくなった気がします。花をかざったつくえや空席が目立つからです。仲良しだった

(数字については「明日に生きる」原文のとおり)



友達がなくなったからです。もっともっと、いっしょにいろんなことをしたいと思っていた多くの友達が、遠くへ行ってしまったからです。

家族や親類を失った友達もあります。家がこわれてひ難している友達もあります。授業の内容や学校の建物が、たとえ元通りになったとしても、友達の顔ぶれは、二度と前と同じにはそろいません。

ほんとうに悲しい、つらいことだけれど、この悲しみやつらさを乗り越えるのが、今のぼくたちにあたえられた課題だと思っています。

震災でなくなられたみな様、ぼくたちのがんばりをどうか見ててください。あなた方のことを、ぼくたちは決してわすれません。

どうぞ安らかにねむってください。

1995 (平成7) 年2月26日 西宮市合同いれい祭 ついとう文

地震時に命を守る避難行動

大きな地震を何度も経験したわが国では、「地震時の心得」が、さまざまな標語として伝わっています。しかし、それはほんとうに正しいのでしょうか。いろいろな意見をもとに、新しい防災の標語を考えてみましょう。

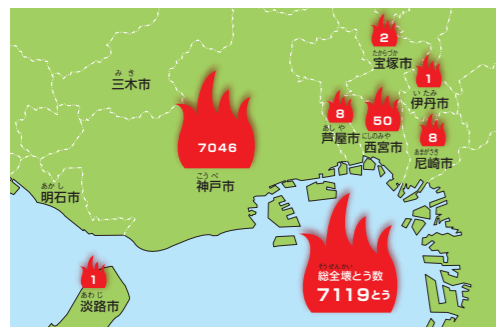


「グラツきたたら 火の始末」



(写真提供 国立科学博物館)

昼食ときに地震が起こった関東大震災では、数万人が火事でなくなつたわ。阪神・淡路大震災では、神戸を中心にたくさんさんの火事があつたわよ。



はわないと動けないようなとき、台所で火の始末をしようと動くことなんてできるのかしら。

震度	人の体感・屋内の状況
5弱	大半の人がきょうふを感じ、物につかまりたいと感じる
5強	たなにある食器類などで落ちる物が多くなる
6弱	立っていることが困難になる
6強	はわないと動くことができない、飛ばされることもある

気象庁「地震の揺れと状況」

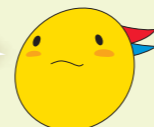


今は、震度5弱程度で都市ガスは自動的に止まるようになっている。プロパンガスも地震などのときは、安全装置がガスを止めてくれる。電気が復旧するときに起こる「通電火災」というのもあるらしいね。



熱をもったままストーブが転ぶと、ガスは止まっても危ないんじゃないかな。

地震時の火の始末はいつすればいいかな？



「あわてて外に飛び出さない」「身をかくして頭を保護する」



1981（昭和56）年に建築基準法が見直され、地震に強い建物の建設が進んだ。阪神・淡路大震災でも新設計の住宅はほとんどひ害を受けなかったそうだよ。

頭を守るものが近くにない場合、動き回るほうが危ない気がするわ。

ゆれているときの行動とけがをした人の割合

〈ゆれているときの行動〉	〈けがをした人〉
家具を支えた	約 10 %
避難しようとした	約 40 %
静止していた	約 2 %



じょうぶな家に住んでいても、家具が不安定だと危ないんじゃないかな。

地震時の行動は、ゆれの強さだけでなく、ゆれている最中なのか、ゆれが収まった後なのかでもちがってくるわね。



下の標語があてはまるるとき、あてはまらないときは、どんなときか考えてみよう。

- ① 「おはしも」（おさない、はしらない、しゃべらない、もどらない）
- ② 「窓やとびらを開けて出口の確保」

地震防災研究を踏まえた避難行動等に関する作業部会報告書(平成22年5月31日)を参考に作成

津波てんでんこ

「てんでん」は、「めいめい」とか「各自」という意味で、「津波てんでんこ」とは、「津波のときは、一人一人がてんでんばらばらになって、少しでも早く高いところにげなさい」という三陸地方に伝えられる心得だそうです。津波のい力や速さは、わたしたちの想像をはるかにこえています。三陸地方は、何度も津波に苦しめられました。「津波てんでんこ」とは、自分の身は自分で守るという決意だけでなく、津波のとき、そばにはいない家族や友人の行動を信らいます。そのためにふだんから最善の備えをしておくという、三陸地方の人々の強い思いが感じられる心得ではないでしょうか。

読んでみよう





わたしにとっての地震

学校に入学して、4年がたちました。やっと自分でバスの停りゅう所まで行けるようになりました。家と道のだん差、歩道の点字ブロック、信号機のメロディ、停りゅう所の手前にある階だんの数……。

でも、あの地震の日から、道路の様子がまったく変わってしまったのです。道路のいたるところにひびわれができ、工事のため、通行止めやまわり道ばかりで、今までの街とは思えません。

1か月ほどたって、学校は再開されましたが、停りゅう所までの道がわかりません。からだ全体で感じていた道が、すっかり変わってしまっています。それからというもの、ずっと、停りゅう所までお父さんやお母さんに送ってもらうことになりました。

地震から3か月ほどたって、工事は一応おさまり、停りゅう所までの道の様子がわかるようになってきました。

いよいよ、一人で停りゅう所まで行く前日の夜、ふとんの中で、道の様子を思いうかべてみました。

「あそこの角を曲がったら、だん差に気をつけて……。」

もう一人でもだいじょうぶ。

次の日の朝、

「行ってきまあす。」

元気な声であいさつをして家を出ました。

ここはいつもの角だなと感じ、道を曲がろうとすると、歩道のだん差がありません。

「ちょっと曲がるの早かったかな。」

「もうすぐ犬がいる家だな。犬、犬……。」

ところが、犬のいる気配がありません。だんだんと不安になってきました。いっしょうけんめいにいつもの感じを思い出しながら歩きましたが、不安はどんどん増していきます。

「おはよう。どこまで行くの？」

と、明るい女の人の声。

「バスの停りゅう所までです。」

と小さい声で言いました。

「わたしのうでを持って。わたしも停りゅう所の前を通るのよ。」

「ありがとうございます。」

と、大きな声で女の人に答えました。

次の日の朝、角を曲がったところで、

「おはよう。」

と、あの明るい声。

「おはようございます。昨日はありがとうございました。今日もお願いできますか。」

と、たのんでみました。

「いいですよ。どうぞ。」

それから毎日、明るい声の持ち主は、

「おはよう。どうぞ。」

と声をかけ、わたしにうでを差し出してくれます。わたしは登校するのがうれしくなってきました。



ぼくらができるひ災地支えん

「ぼくらは何かをしよう。」

そんな声があがったのは、神戸を大地震がおそってから3日目の朝、ボランティアの人たちがやって来たニュースを見ているときだった。

わたしたちのクラスでは、朝も昼も大地震のニュースをテレビで見ている。1日目の朝は、びっくりしてさわいでいた。でも、その日の昼からは、みんなだまってしまった。道路やビルがこわれているだけでなく、火が燃え広がっている。家族をなくし泣いている人がいる。家をなくし立ちつくす人がいる。たくさんの人たちが学校に避難している。人々の苦しみや悲しみが、わたしたちにもひしひしと伝わってきた。

3日目の2時間目から、何かできることはないかとクラスで話し合った。わたしたちの力で、今すぐできることを考えた。学校や避難所にいる人たちにはげましの手紙を送ること、ぼ金を集めて送ること、そして児童会にもよびかけて全校に協力してもらうことに決まった。

児童会の委員が、校門でぼ金を集めている。先生たちや学校に来た大人の人にもぼ金をしてくれる。わざわざ、学校まで持ってきてくれる人もいる。はげましの手紙はわたしたちのクラスで集めている。こんなに集まるとは思っていなかった。1年生の子まで書いてくれた。みんな、大地震におそわれた人々を、少しでも助けたいと思っている。

「地いきの人にもよびかけよう。」

そんな意見も出てきて、学級会で話し合うことになった。

ひ害の大きさに比べたら、わたしたちがやっていることはささいなことかもしれないけど、わたしたちは、今がんばっている。

(明日に生きる「ぼくらは何かをしよう」)

東日本大震災で兵庫の小学生が行った支えん



校内でのぼ金活動 (三木市立別所小学校)



(写真提供 神戸新聞社)

学校でつくった米をひ災地へ送る活動の計画 (豊岡市内の14小学校)

お礼の手紙

豊岡市に住む小学生のみなさん、
お米をありがとうございます。
とてもうれしかったです。
わたしは、すぐに地図帳で豊岡を調べました。そして、
コウノトリのマークがあり、かばんが名産品だと知りました。
豊岡盆地はどんなところですか。
名産は、津波のためにがれきがいっぱいです。それを見ると、
悲しい気持ちになります。でも、みなさんが応援してくれるので、
あきらめなくてがんばります。お米はたいせつに食べます。
大きなつぶのお米にびっくりしました。
ありがとうございました。
南三陸町立名足小学校5年生



(写真提供 神戸新聞社)

津波で流された写真のどろやほこりを取り除く活動 (神戸市立桂木小学校)

支えん物資は箱ごとに分類して送ればひ災地で仕分けをしなくてすむね。



ひ災者のために手紙と折りづるを送る活動 (太子町立斑鳩小学校)



(写真提供 神戸新聞社)

お礼の手紙はうれしかったけど、書くのもたいへんだったでしょうね。





花と水

1月17日、わたしが勤めている^{つと}幼ち園^{よう}にかけつけたときは、すでに500人をこえる^{なんしや}ひ難者でごった返していました。そのときから、わたしは^{なんじよ}ひ難所の仕事に追われる毎日となりました。

そんなある日、

「きれいな花ですね。」

という声にふり向くと、ボランティアの人が花だんに見とれていました。それは、全国花のコンクールで^{さい}最ゆうしゅう^{しやう}賞をとった^{じまん}自慢の花だんでしたが、^{しん}震災後はまったく手入れができていませんでした。

「子どもたちにはかわいそうですが、水がないので、今年はもう花のなえづくりもあきらめているんですよ。」

「さみしいなあ。こんなときだからこそ、子どもたちに^{ひつよう}花が必要な^{ひつよう}のかもしれないのにね。」

その一言が、わたしを^{めざ}目覚めさせてくれました。何としても、花のなえを育てなければと思いました。雨がふるとバケツなどに水をためましたが、3万株以上のなえにはとても足りません。とって、^{きゆうすいしや}給水車の大切な水は1てきたりとも使えません。川の水しかないと思いました。しかし、生活のための水にも^ふ不自由している^{なんしや}ひ難者の気持ちを考えると、昼間、^{なんしや}ひ難者の目の前で花に水をやることは、川の水といえどもできません。

そこで、真夜中になると、自動車にポリタンクを^つ積んで^{あしやがわ}芦屋川に水をくみにいきました。頭とこしにかい中電灯^{でんとう}をつけ、2、3メートル下の川の水をロープにくくりつけたバケツでくみ上げました。こうして持ち帰った水をじょうろに移し替え、一株一株ていねいに水をやりました。多くのなえに水をやるため、何度も何度も^{よう}幼ち園と^{あしやがわ}芦屋川を^{おうふく}往復し、すべてのなえに水をやり終えるこ



ろには、もう夜も明けようとしていました。

ある夜、いつものように水をやっているとき、^{なん}ひ難生活を送っている人が起きてきました。その人は、水やりの様子をじっと見ていましたが、しばらくして、「その水はどこからくんできたの？」

と聞いてきました。それがきっかけで二人は話をするようになり、気がつくとき、わたしは花への^{ねつ}思いを^{ねつ}熱意をこめて語っていました。

「わたしも^{てつだ}手伝っていいかな。」

こうして、^{なん}ひ難生活を送っている人やボランティアの人も^{てつだ}手伝ってくれるようになりました。

寒い冬の水やりはたいへんつらい作業です。何度もくじけそうになりながら、みんなの^{ささ}支えによって、水道が^{ふつきゅう}復旧するまでの2か月間、水やりを^{つづ}続けることができました。

春になりました。

あの3万をこえる花は、いっせいにさきそらい、登園してくる子どもたちをむかえました。^{なん}ひ難生活を送っている人々にも、心の安らぎをあたえました。

わたしは、水をもらった花のようにすがすがしい気持ちになりました。

ぼくたちの夏

2009（平成21）年8月9日、とつ然のごう雨にみまわれ、ぼくたちの町はいっしゅんにして何もかもがうばわれてしまいました。土砂であふれた道路、こわれた家の前に立ちつくす人、たくさんの方のなみだ、多くの悲しい姿がありました。

ぼくの所属する佐用高校野球部は、大切な秋の県大会に向けて練習をしなければいけないのですが、もう練習どころではありません。いても立ってもいられないのです。あくる日、先生や主将の呼びかけで、みんなで佐用の町にボランティアに行くことにしました。



「うっ、こんなにひどいとは……。」

あまりの悲さんさに、はじめは声も出ませんでした。

「とにかく、できることから始めよう。」

ぼくたちは、みんなの役に立ちたい一心で、家の中のどろや土砂をのけたり、水につかたたたみや家財を運び出したりしました。みんな必死です。どんなにたいへんな作業もつらいとは思いませんでした。

そんなぼくたちに、ひ害で苦しんでいる町の人たちは、何度も何度も頭を下げて、

「ありがとう。お兄ちゃんたち。」

と、温かく声をかけてくださいました。

「ぼくたちより何倍もつらい思いをしているはずなのに……。」

かえって元気をもらえたような気分になりました。

そんなボランティアに明け暮れる日々が夏休み中続きました。

ようやく町も少しずつ落ち着き始め、ぼくたちも大会に向けた練習を再開しました。しかし、秋の県大会は1回戦で敗れ去りました。水害後のボランティア活動で満足な練習ができなかったことを後かいはありませんでしたが、試合に負けたくやしきは強く、帰りのバスの中はちんもくが続きました。

高校3年生、最後の夏がやってきました。町の復興とともに、ぼくたち野球部も、甲子園をめざして練習にはげむことができるまでになりました。しかし、えん天下の練習は厳しく、もうやめたいと思うこともたびたびありました。



ある日、練習で心も体もつかれきってしまったぼくたちは、下を向いたまま帰っていました。商店街を通りかかったとき、

「お兄ちゃんたち、わたしたちの分までがんばってな。」

「がんばれ、野球部。応えんしてるで。」

と、町の人たちの温かい声があちこちから聞こえてきました。ぼくたちは、胸にじんときるものを感じました。

「よっ。」

あくる日からは、あれだけ苦しいと思っていた練習がなんだか楽しくさえ感じられました。みんなで声をかけ合いながら、プレーできる喜びを感じながら白球を追いかけました。

夏の県大会が始まりました。ぼくたちにとっては最後の大会です。

試合前、主将がみんなに熱く語りかけました。

「ボランティアのときも地元の人から応えんされ、はげまされた。今度はぼくたちが少しでも町の人のはげみになるような試合をしよう。」

全員で必勝をちかい合いました。そして、チームは、順調に勝ち進み、ベスト16になりました。町の人にも大喜びです。しかし、ベスト8まであと一歩のところまで、ぼくたちの夏はついに終わりました。

数日後、野球部のかんとくに1本の電話が届きました。ぼくたちの夏は終わっていなかったのです。甲子園大会の開会式に先導役として、ぼくたち野球部の主将が選ばれたのです。ぼくたちは、飛びはねて喜びました。どんな形であれ、夢の甲子園に行けるのです。

開会式当日、いよいよ入場行進です。ぼくたち野球部員は、4万人の大観衆とともにスタンドから声えんを送りました。

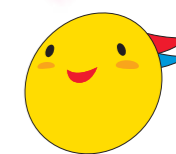
主将が胸を張って堂々と歩いています。主将の行進に合わせてぼくたちも力いっぱい手びょうしをしました。ぼくたちの胸に熱いものがこみ上げてきました。

甲子園球場をうめつくした観客からの温かいはく手が、いつまでも鳴りやみませんでした。

（「佐用町立佐用小学校 道徳資料集」より）



佐用高校の卒業式間近、佐用の町では、商店街のあちらこちらに、佐用高校の生徒への感謝のメッセージがかかげられました。



阪神・淡路大震災からの復旧・復興

1995（平成7）年に発生した兵庫県南部地震は、多くの命と財産をうばいました。人々は自分の力で生活を立て直すことを原則とし、ときにははたがいに助け合い、行政の助けを得ながら復興の道歩んできました。

ここでは、行政のはたらきについて学び、復旧・復興の道のりについて考えてみましょう。

直後

消防隊の救命・救助

地震の直後、多くの住民がぐずれた家屋の下じきになり、広い地域で火災が発生しました。

被災した地域の消防隊は、被害の小さかった地域や全国からの応援を得ながら救命・救助活動を行いました。

消防隊がすぐに来られなかった地域では、住民が力を合わせて家屋の下じきになった人々を助けたのよ。



地震発生直後



(写真提供 神戸新聞社)

2~3週間後



1か月後



(写真提供 神戸新聞社)

1か月後

ライフラインや道路の復旧、学校再開

地震から1か月ぐらいたつと、ライフラインや道路の復旧が進み、学校や仕事も元にもどってきます。家屋の被害がなかった人は安全がもどったように感じ始めることができました。

1年後

がれきの処理が終りようし、復興へ

1430万トンのがれきがうめ立てなどに使われました。復旧が終わり、自分を被災者と意識しない人も多くなりました。復興に際しては、住民と行政が話し合い、地震に強い街づくりが進められました。

1年後



(写真提供 神戸新聞社)

直後から

避難所の運営

地震では、多くの建物がたおれ、家を失った人がたくさんいました。行き場をなくした人々は、近くの小学校などの避難所に身を寄せました。ピーク時には、約1200か所の避難所に、約32万人が避難しました。



(写真提供 神戸新聞社)

半年後

仮設住宅の設置

震災発生わずか3日後から、仮設住宅の建設が行われました。8月には約4万8千の仮設住宅が完成したことにより、ほとんどの避難所は閉ざされました。

このころには多くの人にとって、住まいの問題も解決し、生活が落ち着いてきました。

仮設住宅などでは、だれにも気づかれずに高い者がひとりきりてなくなる「こ独死」の問題も起こったんだよ。



(仮設住宅に入居した人は、被災地全体の約1.7%でした)

半年後



(写真提供 人と防災未来センター)

数年後

災害復興公営住宅の供給

震災からの復興で欠かすことができないのが、家を失った人の住居の確保です。仮設住宅等の不自由な生活をいられている被災者の生活を一刻も早く再建するため、災害復興公営住宅の建設が進められました。

行政は、住む場所の確保に大きな役割を果たしてくれたね。



(写真提供 神戸新聞社)

街並みは数年できれいになったけど、家族や住むところを失った人たちにとって、復興は長い道のりになるね。



(写真提供 人と防災未来センター)

はんしゅういたみえき
阪急伊丹駅



地震直後

復旧



(写真提供 神戸新聞社)

(写真提供 神戸新聞社)

こうべひょうご
神戸市兵庫区



地震直後

復興



(写真提供 神戸新聞社)

災害に係る費用の負担

災害に係る費用は基本的に被災した県や市町の負担とされています。

阪神・淡路大震災の際、国は救命・救助や避難所の運営、仮設住宅の設置といった応急の費用のほとんどを負担するなど多大な支えんを行いました。しかし、兵庫県や被災した市町の復旧や復興の負担は大きく、今も費用の返済が続いています。

2011(平成23)年の東日本大震災からの復旧・復興に際しては、復旧・復興までふくめて国が費用を負担し、被災地の負担を軽くすることになりました。



地震か、震災か

「地震」と「震災」は厳密に区別しなければなりません。家屋の倒壊、火事、それにともなう多くの人命や財産のそう失。この「阪神・淡路大震災」を引き起こしたのが「兵庫県南部地震」になります。

「震災」の大きさは、地震の大きさだけでは決まりません。例えば、兵庫県南部地震と同等の鳥取県西部地震では死者はゼロでした。また、東北地方太平洋沖地震の際は、防潮堤のない地区の住民全員が10分で避難した例もありました。震源の位置に加え、建物の強さ、住民の危機意識など「社会の防災力」が高ければ、地震の被害をおさえることができるのです。

阪神・淡路大震災の経験をふまえ、完成した交流型仮設住宅

阪神・淡路大震災で高い者のこ独死が起こったことをふまえ、東日本大震災の際は、住民が顔を合わせやすい仮設住宅が建設されました。げん関を向かい合わせにし、通路を屋根付きウッドデッキでつなぐとともに、スタッフが朝夕のじゅん回を行うなど、入居者のこ立を防ぐくふうがなされています。



(写真提供 岩手日報社)

読んでみよう



正確な情報を早く知る

大地震が来て停電が起ると、わたしたちはテレビやインターネットといった情報を得る手段を失います。このようなとき、わたしたちはどのような情報を何から手に入ればよいのでしょうか。

大地震の後、まず知りたいのは、今いる場所において安全なのか、どこの病院ならしん察が受けられるかといった命に関わる情報でしょう。停電でテレビが映らず、インターネットもつながりにくくても、ラジオはほぼ受信でき、阪神・淡路大震災のときも活躍しました。

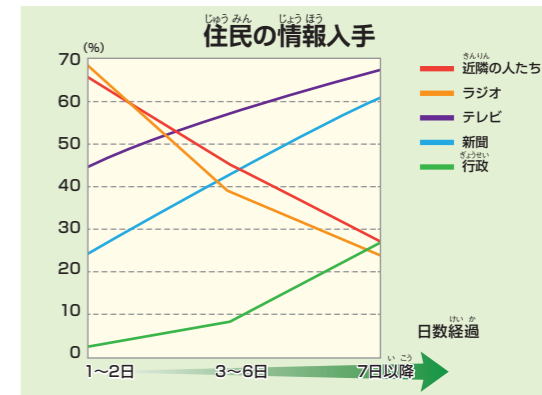
町の防災無線は、津波の高さなどを放送するかもしれません。ただ、行政の想定すらこえた東北地方太平洋沖地震では、実際に来る津波より低い津波が来るとの放送がなされた地域もあったそうです。最後にたよりになるのは、日ごろの防災訓練や防災教育できたえた自分自身の判断力です。

次に知りたいのは家族の安全でしょう。電話がつながりにくいときは、NTTやけい帯電話各社の災害伝言板などを使って連らくをとることを考えましょう。

少し落ち着くと、被害の全体像を知りたくなります。テレビやラジオ、インターネットは刻々と新しい情報を発信するでしょう。阪神・淡路大震災のとき、神戸新聞は京都新聞の協力を得て、地震当日の夕刊を被災地に配りました。東日本大震災のとき、石巻日日新聞は、手書きのかべ新聞を被災所に張り出しました。近所の人も重要な情報源ですが、大災害の中で混乱している場合もあるので、まちがった情報にまどわされないようにしましょう。

災害時に家族と連らくする方法

NTT災害伝言ダイヤル「171」やけい帯電話各社の「災害用伝言板」(震度6以上の場合)で、家族間の安全確認ができます。



ひ難住民の行動実態調査 (神戸市都市問題研究所)



▲地震当日の神戸新聞(1995年1月17日の夕刊1面) (提供 神戸新聞社)

災害用伝言ダイヤル等の体験期間
●毎月1日・15日
●防災週間 など
※しよ細は各電話会社のホームページで確認。



か せつじゅうたく 仮設住宅



「浩司，学校へ行きよんか。」

となりのおっちゃんが，真っ黒に日やけした顔で聞いた。

「うん。」

ぼくは，元気に答えた。ぼくは，今，仮設住宅に住んでいる。

ぼくの家族が家の下じきになってから，一年半になる。家は，完全にだめになったけど，家族は何とか無事だった。そのときは，「生きていてほんとうによかった」と思った。

でも，今まで住んでいた家を工作車でかたづける日は，とてもつらかった。家族4人でその様子をじっと見ていると，見慣れたかべや今まで使っていたたんすやつくえが，みるみるくずされていく。無性にはらが立ってきて，思わず，

「地震のバカヤロー。」

と，どなっていた。

ふと父を見ると，取りこわされていく自分の家の一点を，まばたきもしないでじっと見ていた。父の目にはなみだが光っていた。そんな父を見ていると，ぼくはなみだがあふれ出てきた。

避難所にいたとき，「家族だけで住めるところが早くほしいな」と思っていたから，仮設に入れたときはとてもうれしい気持ちだった。でも，いつまでも住んでいるところではない。

夏の暑さといったら言いようがない。部屋の中はまるでサウナのように，40度をこえることがしばしばあった。冬は冬でとても冷えるし，不便なことも多い。電気をたくさん使えないので，一つのこたつに家族みんなが足を入れてねた。

それにこのごろ，新しい家がいっぱい建っている。家を建てて仮設を出ていく家族がいると，ぼくも「家がほしいなあ」と思う。いつになったら，ぼくたちの家ができるのか。ぼくたちには，まだ当てがない。そんなことで，ときどきいらいらすることがあった。

「しんぼうだよ。がんばっていたら，きっといいことがあるから。」

と，母は言う。父も，

「浩司，心配せんでもええぞ。何とかするから。」

と，毎日，元気に仕事に出ている。父や母の気持ちを考えると，ぼくはしっかりしなければと思う。

学校に行くと，友達がいる。みんな，それぞれにたいへんなことを乗り越えて，元気を出しているのだ。そう思うと，ぼくにも勇気がわいてきた。

ふれあうと温かくなるね



温かい手にふれると、
安心できるね。

(写真提供 共同通信社)



こうすると心も体も温かくなるよ。

1 一人はいすにすわり、もう一人はその後ろに立ちましょう。
後ろの人は、前の人のかたに手をやさしく置きましょう。
そのとき、前の人はどこに手を置いてもらうと気持ちよいか、後ろの人に教えましょう。
後ろの人は、その場所に手を置きましょう。



2 前の方は、力を入れてゆっくりかたを上げてください。(1)
そのまま少しがまんしたら、後ろの方の合図でストンと力をぬきましょう。(2)
①から②をくり返しましょう。



3 後ろの方は、前の方に気づかれないようにゆっくりゆっくり手をはなしましょう。

明日も遊ぼうね

震災で家を失い、わたしたち姉妹3人は、いとこの家でくらししました。

夜ねるとき、家を失ったことや、親とはなれてくらすことなどの悲しさやくやしさが、なみだとなって出てきました。学校に行けない。家族とはなればなれになっている。すべてのものがなくなった。これから先どうなるんだろうと思うと、不安でいっぱいになり、一人になる夜がとてつらかったです。

しばらくして、いとこの小学校に通うことになりましたが、学校に行く前の夜は、明日のことを考えてますます不安になってきました。

次の日の朝、学校に行くと、児童朝会があってみんながずらりとならんでいました。わたしのむねはどきどき打ち始めました。いよいよわたしの番です。むねのどきどきは、まわりに聞こえるほどになってきました。

「5年、川上いずみです。」

声がかすれてしまいましたが、みんなははく手をしてくれました。

休み時間になりました。一人になったらどうしようと思っていると、たくさんの子が、

「いずみさん、いっしょに遊ぼう。」

と、言ってくれたので安心しました。外に出て雪だるまを作りました。一日で友達は何人もできました。わたしは、もっとみんなと遊びたいと思いながら帰りました。

次の日から、わくわくしながら学校へ行きました。

「明日も遊ぼうね」という一言は、友達を勇気づける言葉だね。



(明日に生きる「転校」)



今日は 青い日

お日様が

まぶしいぐらい光っている

空が青い

いつにもまして 青い

校庭に

元気な声が飛んでいる

あの地震が うそみたいに

元気な声が飛んでいる

地震になんか 負けないぞ

今日は 青い日

明日も 青い日

